

附属病院と附属幼稚園

勝 部 真 長



私は以前に狭心症の発作を起こして、三度入院したが、二度は私立病院、一度は大学の附属病院であった。私立病院は患者の治療に一生懸命である。治療に失敗して患者を殺してばかりいると、病院の評判がガタ落ちして入院患者が減るのを恐れるからである。私立病院は医師も看護婦も入院患者に対してお客様扱いをしてくれる。

ところが大学の附属病院、とくに国公立の附属病院はやや趣きがちがつてくるようである。第一、大学の附属といふものは、患者の治療と並んでその医学学生を教育し、また教授たちが研究し実験する場として、附属病院を使っているのだからである。

いいかえれば大学の附属病院では患者の治療だけを目的にしていない。それよりも新しい病気、珍しい病気を発見し、研究し、実験し、論文にまとめ、発表し、学術

上の研究成果をあげることを大きな目的にしている。だから附属病院で歓迎される病人は、鼻力ぜひいたりはやり目などありふれた病人ではない。ちょっと首をかしげるような難病奇病の患者ほど大事にされるのである。そこで患者は研究材料にされる。私も心臓の二十四時間の動きを電気で記録するテレメーターという機械にかかりて、一晩中、計測器を手足や胸につけて横になっていたことがあった。三人の医師が寝ずの番で替る替る記録をとってくれた。私は私のために調べてくれるのだと思つて大いに感謝した。しかし後で気がついたことは、そのテレメーターの調査は、三人の医師が学位をとるための共同研究の資料にするためであって、そのことで私の病気が直接によくなるというわけのものではなかつた。私はモルモットの代用だったのである。

心電図をとる時、ときどき医学部の学生が実習にきて、私の分もとつたりするが、下手くそで私は笑い出しある。いつもの看護婦の方がよっぽど要領がよくて正確なのだ。

研究に熱心なのは学者として結構なことに違いないが、その学術上の野心のために患者を研究の手段としてのみ

扱い、患者の病気を全快させることを忘れててしまう医学者が現われたりするのは困る。よくわからないが北海道医大で起こったW教授の心臓移植の実験とか、東大の精神科で問題にされたU教授の人体実験問題など、どうも研究熱心のあまり勇み足がつい出てしまうのであろうか。

医学は人間の健康を対象とするのであるから、狭い部分や小領域についての専門研究だけでなく全体としての生命観・身心観がなくては、病気はなおせないだろうと思う。専門家というものは時に視野が狭く、専門バカが多い。専門バカは、片足で立っているようなもので、不安定なのである。学問が細分化されればされるほど、専門家と自称する学者先生については警戒を要する。

幼稚園教育についても附属病院と同様の危険があるよう思う。子どもを教育することが第一義の道であるは

ずなのに、教育よりも自分の「研究」、「実験」、「観察」を優先させて、子どもたちを「手段」として、「モルモット」として扱うような傾向が、研究者が自分の研究成果をまとめる 것을あせるあまりに、つい勇み足をしてしまった心配が、大学の附属学校には起りかねないのである。

たしかに大学の附属学校は、研究の場であり、実験の場であり、教育実習の学生たちの実習の場である。そのことを抜きにして附属というものの存在理由はない。しかし何も知らずに入つて来た子どもたちにとっては、それは迷惑な話である。子どもたちはただ成長したい、生活したい、伸びたい、遊びたい、学びたい、というので通つてはいるのに、うるさく附きまとって「観察」されたり、「実験」されたりしているのは、かわいそうな気がする。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)